第２章

大正～モダンガールの登場～

■大正時代　大衆文化の出現

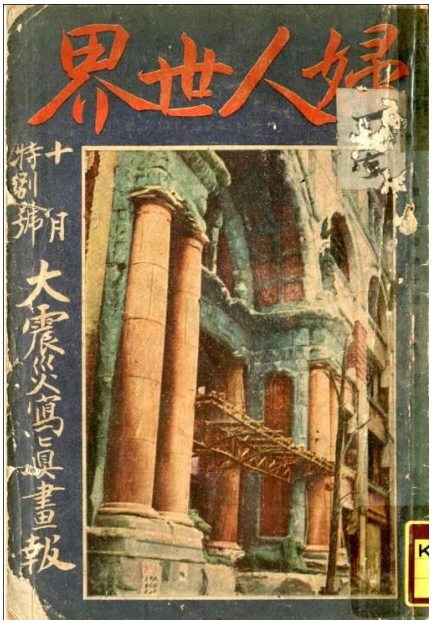
1912 年から 1926 年までと短い大正時代ですが、人々の生活スタイルに大きな変化をみることができます。1914 年に勃発した第一次世界大戦後日本では産業化が急速に進み、農村から都市へと人々が続々と集まるようになりました。会社勤めをするサラリーマンなど新しい働き方をする職種が生まれたのもこの頃です。

この時期になると、電力供給や鉄道整備など都市を中心に生活環境もより近代的なものとなっていきます。サラリーマンは、休日家族と一緒にデパートメントストアに繰り出し、カフェーでは女給たちがコーヒーを運ぶ。その背景には、「大正デモクラシー」と呼ばれる、民主主義を求める自由な風潮が広がっていました。

家庭におけるそれぞれの役割も変化し、サラリーマンの夫を支える主婦という新しい女性の在り方も登場しました。大正時代にはその主婦に照準を合わせた商業女性誌が数多く創刊されます。その数は 145 誌に上ると言われており、雑誌界で一大勢力をなすようになりました。

多くの読者を獲得し、しかも長期間にわたって発行された代表的な雑誌『主婦之友』・『婦人倶樂部』・『婦人公論』はこの時期に創刊されています。

好景気をもたらした第一次世界大戦ですが、戦後は他国が立ち直り生産過剰となったため、日本は一転して不景気に突入します。しかも 1923 年 9 月 1 日には関東大震災という大打撃も受けました。



大震災の被害の様子を伝えています。
『世界婦人』（實業之日本社）
18 巻 10 号[1923 年 10 月]
表紙

■職業婦人たちの登場　ーモダンガールー

大正デモクラシーがもたらした自由主義の風潮には、女性解放も含まれていました。さらに産業の発展は男性だけでなく女性にも新しい職業を生み出し、いわゆる職業婦人が登場します。それまでは教員や看護婦、女医といった専門職に限定されていた女性の職業が、美容師、事務員、タイピスト、店員、電話交換手といったサービス業に広がっていきます。そして断髪、洋装、洋風化粧姿で都会を闊歩し、大正後期には「モダンガール」と名づけられる女性たちが現れ始めました。当時はまだ束髪・和装の女性が大半であり、メディアを通してみるモダンガール達はまさに時代の先端の象徴で、婦人雑誌にももちろん、モダンガールたちが多く登場します。

■大衆文化と婦人雑誌

ライフスタイルの変化は文化を消費する「大衆」を生み出します。大衆に受け多くの発行部数を誇った婦人雑誌は、商業主義に走っているとの批判を受けました。当時としては過激な内容（性病等）を取り上げた号もあり、取り締まり当局より注意、悪くすると発売禁止処分を受けることもあったのです。

このような婦人雑誌の商業主義に、たとえば「現代婦人雑誌批判」（『改造』第 4 巻 10 号[1922 年 10 月]）など、批判的な特集が組まれています。女性運動家である山川菊栄も繰り返し商業主義を批判していました。しかし、読者の一員であり知識のない貧しい女性たちにとって、その情報は生活の助けとなるものであったことも事実です。

■三大婦人雑誌の誕生

1905 年に創刊された日本で最初の女性向け高級グラフ雑誌『婦人畫報』と合わせて、後にいわゆる４大雑誌と称されるようになる『婦人公論』・『主婦之友』・『婦人倶樂部』の３誌が大正時代に創刊されました。
大衆文化の確立、女性読者の増加といった背景に伴い、婦人雑誌は他の雑誌に比べて販売部数を飛躍的に伸ばしており、各社もこぞって力を入れていました。

『婦人公論』

中央公論社（1916 年 1 月創刊）

1913 年 1 月『中央公論』の嶋中雄作が中心になって発行した増刊「婦人問題号」がきっかけとなって、『婦人公論』は生まれました。
新しい近代的自我、女性の自覚、解放をうながすことを目的としており、『主婦之友』・『婦人倶樂部』といった生活実用誌とは一線を画した内容となっています。婦人参政権運動問題、母性保護論など、女性問題を多く取り上げているのが特徴で、知識階級の女性をターゲットにしていました。
ちなみに 1913 年 8 月には、東北帝国大学に女子の入学が許可されています。

『主婦之友』

東京家政研究會（1917 年 2 月創刊）

同文館書店の住み込み店員として下積みから始めた石川武美が創刊しました。最初は発行部数１万部ほどでしたが、中流家庭の主婦に焦点を絞って編集の柱を貯蓄や病気などにしたところ、特に既婚女性に多く読まれ、1920 年には 10 万部を超え婦人雑誌第一位の発行部数となります。1921 年に社名を主婦之友社に改名し、1954 年 1 月には誌名を『主婦の友』に変え 2008 年 6 月に休刊となるまで刊行されました。

『婦人倶樂部』

大日本雄辯會（1920 年 10 月創刊）

野間清治が設立した現在の講談社が創刊した雑誌です。最初は『婦人くらぶ』と題し、値段も他の婦人雑誌が 40 銭のところ 80 銭と高めに設定し、ハイカラな高級誌を目指していました。ところが販売部数が伸びず、1 年後には大衆向け生活実用誌へと大幅に路線変更、『婦人倶樂部』として再スタートしました。働く 20 代前半の女性に受け入れられ人気を博しましたが、1988 年 4 月に休刊しました。

当時婦人雑誌に掲載された主な記事

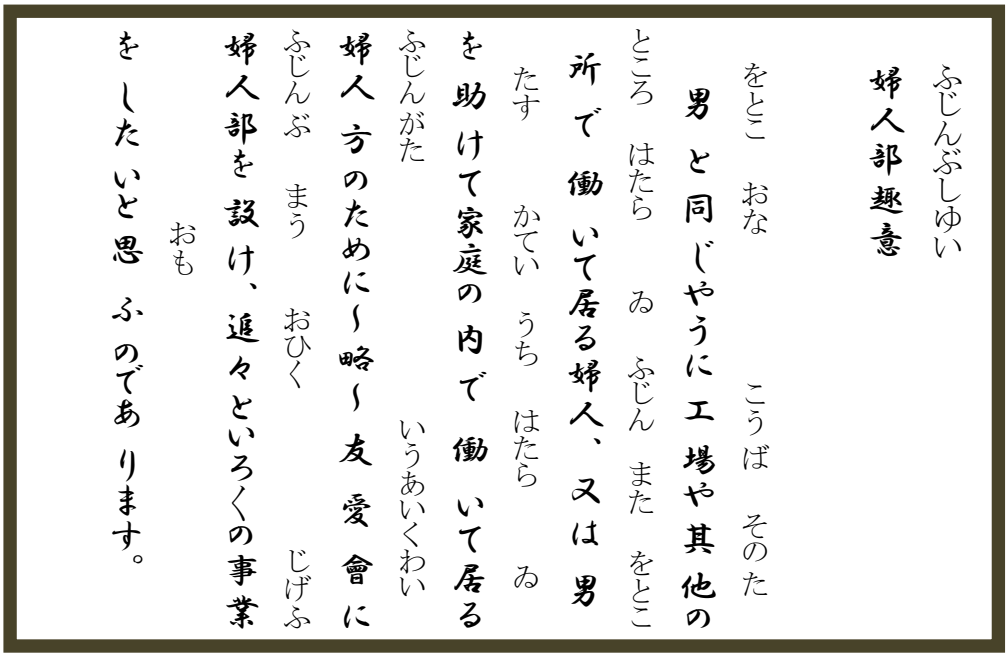
「今の女は何を要求するか」	(『婦人雑誌』1915 年 7 月号)
「必ず美しくなれる日常簡易洗面法」	(『女の世界』1915 年 5 月号)
「再婚か？独身か？」	(『新婦人』大正 9 年 5 月号)
「無人島に漂着した實験」	(『家庭雑誌』1922 年 5 月号)
「小説　都会の憂鬱」佐藤春夫著	(『婦人公論』1922 年 5 月号)
「婦人の職業で何が最も有望か」	(『新女性』1923 年 4 月号)
「上中下各種婚禮一切の費用調べ」	(『婦人倶樂部』1923 年 4 月号)

■女性向け機関誌の創刊ー社会運動の活発化ー

第一次世界大戦後、1918 年にイギリス、1919 年にアメリカで婦人参政権が実現しました。また 1917 年に起きたロシア革命の思想的影響も大きく、大正デモクラシーの気運に乗って、米騒動が全国的に波及した農民運動を始め、普通選挙運動、労働運動が活発化します。その勢いは、男性向けはもちろん婦人向けの機関誌を誕生させました。

『友愛婦人』　友愛會婦人部（1916 年 8 月創刊）

友愛會は 1912 年 8 月に設立された、労働者と資本家が協力して労働者の立場を改善しようという労使協調主義の立場からつくられた労働団体です。1916 年 6 月には友愛會婦人部が結成され、次いで 8 月に『友愛婦人』が創刊されました。「働くことは女の恥ではありません、尊いことです」というメッセージを伝えています。


ふじんぶしゆい
婦人部趣意

をとこ　おな　こうば　そのた
男と同じやうに工場や其他の
ところ　はたら　ゐ　ふじん　また　をとこ
所で働いて居る婦人、又は男
たす　かてい　うち　はたら　ゐ
を助けて家庭の内で働いて居る
ふじんがた　いうあいくわい
婦人方のために～略～友愛會に
ふじんぶ　まう　おひく　じげふ
婦人部を設け、進々といろくの事業
おも
をしたいと思ふのであります。

『友愛婦人』創刊号
婦人部趣意の一部